

主のみ手が共にあったので
——アンティオキア教会の始まり

使徒言行録 11 : 19 - 30



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年5月5日

復活節第6主日

上野聖ヨハネ教会にて

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。」ヨハネ 15:9

「わたしの愛にとどまりなさい」

今日の福音書の初めに聞いたこの主イエスの言葉を、わたしたちの心にとどめたい。イエスがわたしたちを愛してきたと言われるその愛のうちに、とどまりたいと願います。

このイエスの愛が人々を動かしたので、教会が誕生しました。今日の使徒言行録に記されていたシリアのアンティオキア教会もまた、このイエスの愛によって始まったのです。その様子を今日は見つめてみることにしましょう。

「ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。」11:19

エルサレムの教会の力ある指導者ステパノが石で打たれて殺されたことがきっかけとなって迫害が起こり、多くの信徒たちがあちこちへと散らされて行きました。その行き着いた一つがシリアのアンティオキアです。エルサレムから北の方、およそ500km 離れた所で、当時のローマ帝国の中では、ローマ、アレ

クサンドリアにつぐ第3の大都会でした。人口は50万人を超えていたと言われます。ここに成立したアンティオキアの教会が、やがてイエス・キリストの福音を世界に広める基地の役割を果たすことになりました。パウロの3回にわたる伝道旅行は、このアンティオキア教会を出発地としたのです。

アンティオキアに行った信徒たちは、初めは同胞のユダヤ人だけにイエスのことを語っていましたが、やがてギリシア語を話す人たち、また外国人にもイエスの福音を語るようになり、信じる人の群れは大きくなっていきました。こう記されています。

「主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。」11:21

これは大切にしたいことです。ほんとうに人を生かし、闇から救うのはイエス・キリストなのですから、機会が与えられたなら、人にイエスさまのことを伝えたい。そのとき、わたしたちには主の助けが与えられるのです。

ところでここは「主がこの人々を助けられたので」と訳されているのですが、ギリシア語原文を見ると、「主の手が彼らと共にあったので」と書いてあります。主イエスのために働くとき、何か人のために意味のあることをするとき、主のみ手が共にある。主のみ手がわたしたちを支え、守り、また押し出してくだ

さる。こんなに力強いことはありません。主のみ手に守られ導かれて、アンティオキア教会は発展していきました。

アンティオキアに教会が誕生して発展しつつあるといううわさが、エルサレムの教会にまで聞こえてきました。そこでエルサレム教会は、バルナバという人を選んでアンティオキアに派遣しました。バルナバには期待と不安があったでしょう。こんなに遠く離れた所に、同じイエス・キリストを信じる人々が集っている。何とうれしいことか。早く会いたいという期待。と同時に、その人々の信仰は確かなものか、また自分を快く受け入れてくれるのか、という心配もあったかもしれません。

「バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び……」 11:23

バルナバがアンティオキア教会に到着し、そこの信徒たちに出会い、礼拝に出席したとき、喜びが溢れてきました。人数は分かりませんが、仮に想像してみても、アンティオキアの人口 50 万人の 1000 分の 1、0.1 パーセントが集っていたとすれば約 500 人です。いや 100 人くらいだったかもしれませんが、とにかくその礼拝には真剣さと力がある。何か温かいものがある。この人々に、この教会に、ほんとうに神の恵みが注がれている、とバルナバは感じました。主イエスを語る人の熱意があるし、また信徒の真心からの祈りがある。主がみ手をもってこの人々を

包んでおられる。感動と感謝がバルナバに起こりました。

と同時に、しばらく滞在していると、アンティオキア教会の抱える問題や課題も増えてきました。いったんは信仰に入ったけれども、確信を持たずにぐらついている人がいる。イエスを求めつつも、昔からの宗教との間で心が定まらない人がいる。教会の中には微妙な葛藤もある。それでバルナバは心を尽くして会衆に呼びかけました。こう書かれています。

「固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。」 11:23

迷わないで、決意して、主イエスにとどまりなさい。主から離れることがないように。イエスの愛が確かにあなたがたに注がれているのだから。主イエスのみ手があなたがたを守っているのだから。

もうひとつバルナバにはとても気がかりなことがありました。それはサウロ（パウロ）のことです。あのかつてのキリスト教迫害者サウロ。回心して熱心な伝道者となったサウロ。そのサウロをエルサレム教会の指導者に紹介して、お互いの間に信頼関係を結ばせたのはこのバルナバだったのです（使徒言行録 9:26-28）。このアンティオキアでサウロに再会できると思っていたのに、何があったのか。サウロは故郷のタルソスに引きこもってしまったというのです。それでバルナバはサウロを探し

でタルソスに行き、見つけ出して、アンティオキア教会に連れ戻しました。

バルナバはそこで丸1年の間サウロと一緒にいて、多くの人々を教えました。このバルナバとサウロ協力、また多くの信徒の努力によって、アンティオキア教会はさらに信仰と愛に燃える教会として大きく発展したのです。

それだけではなく、やがてアンティオキア教会は、遠く外に向けて宣教師を派遣する教会になります。使徒言行録 13 章にこう書かれています。

「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。」 13:2-3

このようにしてバルナバとパウロは、アンティオキア教会から出発して福音を遠くまで運んでいくことになりました。このアンティオキア教会の存在と祈りと働きがあったから、福音はヨーロッパに広がり、やがては日本に届き、このわたしたちのところまで届いたのです。

教会にとって大切なことは何か。それは 11 章 21 節から聞いたように、主のみ手が働いてくださることです。主イエスがみ

手をもってわたしたちを支え、守り導き、また押し出してください。その優しくも力強い主のみ手を、わたしたちも経験したい。そのために、アンティオキアの人々の真心からの礼拝、またサウロを探しに行ったバルナバのような愛と行動。わたしたちもそれにならうことができますように

祈ります。

神さま、アンティオキアの教会に燃えていた信仰と愛をわたしたちにもお与えください。どのような困難や心配があっても、主のみ手がわたしたちを包み、支え、力づけてください。神さま、わたしたちにもあなたの恵みを注いで励まし、導いてください。主のみ名によってお祈りいたします。アーメン